

お日様の下で

石川
悌義

日芸文芸楊々三

午前の競技が終わり、グラウンドには影ひとつない。生徒はみんな校庭の木のあるところに散り、木陰では各々の家族が待っていた。

このレジャーシートは日光に包まれ、その上に女性が座っていて、息子がトラックから走ってくるのを見てお弁当箱をシートの上に並べ始めた。

「暑かったでしょ。ここ、座りな」

そう言つて母親はシートの際の方の日陰を指さした。それは子供ひとりがかやつと座れるくらいの大きさだった。

「ん」

とだけ答えて息子はそこに座り、目の前に置かれたお弁当箱を開けて黙っておにぎりをほおばりだした。

母親は次々に箱を開けた。ウインナーや卵焼きや唐揚げやらが入っていた。全部開け終わつて、上目遣いに息子を見た。少年は黙々とおにぎりを食べている。そして顔の汗が垂れかかったのを体操着の袖で拭おうとしたので二の腕と袖口の間を通して脇から乳首までが女性に見え隠れした。脇にはまだ毛が生えていなかった。女はそれで視線を下にそらして、

「ウインナーもあるよ」

「ん」

「トマトも」

少年はおにぎりをかじった。

「ほら、唐揚げ、好きでしょ。たくさんあるよ」

「見ればわかるし」

少年は明後日の方向へ視線をそらしながらそわそわと揺れ動きだした。女は目の前の男子の息が荒いのと、もじもじしているのに気づいて、ニヤニヤした。

「おしっこ？ ついてってあげようか？」

少年は日陰の方、他の多くの生徒たちがお昼ごはんを食べている方を見回していたが、強く勢いのある声で

「ちがうし、いいし！」

と言って、おにぎりが入った箱と唐揚げが入った箱に蓋をして、わしづかみにして立ち上がり、立ち去ろうとした。母は張り詰めた高い声で

「ちよっと！どこ行く気」

息子は口をへの字にして、振り返ったが視線を母の方へは向けない。

「渡部のところ」

母親は息子をじっと見ている。

「なんで」

「呼ばれたから」

「なんで」

彼女の眼はうろろろと動き出し、息子はうつむいていた。女性はお弁当箱に蓋をしだした。

「いいよ。渡部さんのところのお弁当食べれば。これはもう捨てるから」

「捨てないでよ」

「だって食べないんですよ。それも置いてきなさい！母さんの作ったお弁当より渡部さんのところを食べたいんですよ」

「これも食べたい」

「嘘。捨てるから、置いていきなさい」

「食べるって！」

「食べるう食べたいじゃなくて？渡部さんのところのはわざわざ行ってまで食べたいの？」

「食べたいー食べたいって！」

「じゃあここで食べなさい」

息子はうつむいたままレジャーシートに再び腰を下ろした。弁当箱の蓋がまたすべて開けられたが息子は何も手を付けようとしなない。

「ほら、一緒に食べよう。こっちおいで」

女性は自分の隣を叩いた。シートはその部分は日に照らされてすっかり熱くなっていた。息子は従った、黙って。

「ちょっと暑いかもしれないけど、こうやってお日様の下で食べるのも素敵でしょ。ほら、唐揚げ、食べたがってたじゃない。食べて」

日光が斜めに照り付けている。二人と、二人が座っているレジャーシートは明るい。ぐんぐん気温が上げられていく。女性は汗をタオルで拭きながら横目に男の子をちらちらと見やっっている。男の子の体操着は汗で肌張り付いていて、生地が擦れて薄くなった部分からは細く、筋肉と骨が浮き出た少年の肢体が透けていた。女は口の中に溜まっていたつばを水筒で流し込んだ。

「ねえ、汗すごいね。拭いてあげろ」

母親の手がタオルを持って近づいてきたのを少年は払った。陰の方からたくさんの生徒と、その家族たちの話

声がしている。

「自分のあるし。それ、母さんでしょ」

「そうだけど・・・じゃあ、今日久しぶりに一緒にお風呂入らない？たくさん汗かいてるからきつきもちいよ」

男の子は自分のタオルで首や顔を拭き、体操着の中を拭いた。ほっそりとした腹に腹筋が浮かんでいた。そのまま男はハーフパンツの中に手を突っ込んでタオルをもそもぞとごかした。それを女はじっと見ている。

「ね、私が洗ってあげるから。きつきもちいよ。今日は一緒にお風呂、入ろうね」

一通り汗を拭き終わって男は立ち上がった。

「やっぱり、渡部のとこ行く。約束だから。あと、風呂は一人で入る」

女の眉間に深い深いしわができた。

「捨てちゃうよ！からあげ！」

「捨てていいよ」

男は日陰の方へと歩いて行った。このレジャーシートには女と、食べかけのおにぎりほとんど手つかずの色々なおかずがあつて、お日様の光に包まれていた。